

## 農 村 地 域 と 高 齢 者

富山県農村医学研究会 越 山 健 二

寿命の延長、出生率の低下により、人口構造が変わり、高令社会への速度を早めている。その対策は深刻で医療や福祉をはじめ就労など各方面で論議され関心も深まりつつある。そんな中で富山県農村医学研究会では、昭和58年農村地域に居住する中高令者について保健調査を施行した。その詳細は本誌にも報告されているが、集計にだずさわったので所感をのべてみたい。

調査の対象となった人たちは明治末期から大正期にかけ生まれた人たちが青少年時代を厳しい生活環境の中で生き抜き、戦争を体験し、衣、食、住をはじめあらゆる欠乏に耐えた人たちである。その多くは農村に生まれ育ち、農業に従事した人もあるが、農業以外の仕事につき、定年退職して第二の人生を農に求め農業に復帰した人も多い。子供や孫たちと同居し家族数も多く、家族からも大事にされ毎日の生活に満足し、充実した日々を送る人が多いようである。収入は老令年金やその他の年金もあり、一部には恩給のほか賃金など副収入もあって経済的に深刻な悩みはなく、ほとんどの人が貯金をもち、欠乏感やまずしさを感じていないようである。支出の主なるものは付き合い、即ち交際費である。旅行にもよく出掛け、衣食や趣味、娯楽などの出費は少なく、僅かに酒、煙草の支出がある。身体的には視力、聴力の減退、もの忘れや根気もなくなったと感じている。多くの人からだの訴えがあり医師の診療を受け、はりや灸も多く行われている。各種の保健薬、民間薬も多く使われ、体操や栄養など、おもいおもい

の保健法が行われ、保健に対する関心の深さを示している。朝は6時前に起床し夜は9時までに就床して、多くは1日が短く退屈することがないという。

田畑の管理や孫の世話、料理、洗濯、買物など家計の重要な部分に責任をもち仕事に追はれるという人が多かった。このように家庭における重要な役割は家族や近隣からも評価され大事にされることにもなり大きな生き甲斐となっている。

又知人、友人、仲間にもめぐまれている。農村は今日なお共同体的な思考が色濃く残されており、出産、病気、成人、結婚、普請、葬式など、村十部といわれる行事には共同してサービスを供給する気持が残されている。高令者の孤独、淋しさは平常からのつきあいの深さによって、たくさんの仲間がおり癒されており、その土地を離れたくないという。

また農村地域には連綿とした信仰がある。朝の勤行が多くの家で行われ、仏壇の前で子や孫との会話が交され、人生行路や生き方が語られる場でもある。

病気や死については多くの人が身近なものとして感じており、床につくような病気になれば子供や配偶者、嫁に世話になりたいが、ころりとぼっくり、余り迷惑をかけずに家で、親族にみとられて死を迎えたいという。

30%以上の人が死後の世界を信じており、信仰の深さが感じられ精神的にも安定し、悩みの解消に役立っているようである。

一般に高令者の苦悩は病気、貧困、孤独、無為(生き甲斐のなさ)の四つに集約されている。

農村地域にはまだまだ新鮮な空気や水、輝く太陽と四季折々の美しい自然が残されている。畑を耕し、草花を栽培し、たえず身体を動かすことによって身心の老化を防ぐことも可能である。朝の勤行、信仰の生活、集落の伝統の行事は仲間をつくり淋しさはない。高令者の農村地域での役割はますます増大しているように思われる。このようなことから農村地域の高令者はめぐまれた状況にあるといえる。

今日は科学技術の時代、人類の第三の波の

時代ともいわれ、まさに激変、激動の時代の中にある。人間のくらしやそれに伴う意識の変化も計り知れないものがある。昭和生まれの人が高令期を迎える時代が間近にせまっている。家庭や地域にうるおい、ぬくもり、慈しみ、思いやりなど豊かな人間性が求められ、そんな中で的人生の終末が期待されなければならない。定住圏や、田舎都市構想が模索されている。農村地域の高令者のくらしが何等かの指針になるのではないかと考えている。